ばらの精

何か、とってもすてきな一日だったのです。話させてくださいますか？

5月 15 日（火）、一年生の遠足で、長岡天神へ。心配していた中川さんも元気そうで、始めから気分がよかったんです。

電車は、三校がいっしょになって、満員でした。私は、中川さんやクラスの子どもたちと一緒に、進行方向左側のドアから、外の景色を見ていたのです。

高槻市駅を過ぎて、大阪医大の建物が視界から消えてすぐぐらい、家全体がばらではないのかな、と思うような美しいかたまりが、目の中にはいってきて、また消えていったのです。でも、心の中に、ばらの数々が焼き付けられ、香りをただよわせだしたのです。

帰りの電車で、もう一度見られるのも楽しみでした。今度は、まわりの子どもたちにも知らせながら見ましたよ。

遠足から帰ってきて、家庭訪問とひと仕事。時刻が 5 時をまわり、少し疲れていたけれど、家でゆっくり休みたい、という気持ちを振り切って、何かに引かれるようにして、出かけていったのです。―― 電車から見た、あのばらの花あふれる家へ。

ピンク、明るい赤、白。とても数え切れないほどの多くのばらの花が、どの花もしあわせそう。喜々として風にゆれている。ばら達がうたう、声なき歌が聞こえてきそう。葉っぱが奏でる音楽が聞こえてきそう。

黄、真紅。ばらとは思えないくらい太い幹。金網の垣にからませて、ばらの垣根となっている。根っこのところには、わらや肥料らしきもの。大事に、大事にそだてているという感じ。

ここまで咲かせるためには、当然のことながら、手入れがなされ、咲かせようとする限りない愛情がなければならないことだろう。放っておいて咲く花は、それだけの花だ。野生のままでは、ここまでの美しさはない。造物主は、人の苦労を勘定に入れて、美しさを与えている。

入口の上も、ばら。表札を見る。薔薇館の主（あるじ）の名は、伊藤克三さん。
失礼をかえりみず、そっとのぞいてみる。内庭も、ばらばかり。ばらを愛し、こよなく愛しているもので、まわりをとりかこんでいる ―― という感じ。
主人とご一家の心が伝わってくる。

根元はやはりワラでおおい、手厚く育てられている。どの一本も、おろそかにされていない。それぞれが本当に、喜々として咲いているのだ。
花は、愛情で育てていくものだ。幹や葉の色つやが違う。

淡いピンク、淡い黄。花が咲いている時には、人は関心をもつが、美しい花の命はみじかい。1年365日の内の、300数十日以上は苦しい日々であろう。苦しい中に、喜びを見出していく日々であろう。

あれもこれもではなく、徹底してばらのみを追求し、ばらにおける完全を期している。
それ故に、それぞれが美しく咲きながら、全体としてのとてつもない、大いなる美しさ。一つのばら、数本のばらでは、とても出せない美しさがここにはある。

今咲いている花、まもなくの開花の準備をしている花。
何分いただろう。多くの人は、そばを通るが、きれいなあ、すごいなあ、というだけかもしれない。じっと見つめていたい。

白い服の高校生ぐらいの少女が、仲間に加わった。
行きつ・・・・ もどりつ・・・・ 少し離れて、メモを取りながら見ている私の前を。
ピンクのばらに顔を寄せて、ばらの香をかいでいる。
あ、そうそう。ばらの香りのことを忘れていた。私もばらに顔を近づけて、香りをかいでみたくなった、あの乙女のように ―― そう思って一歩を踏み出した時、その少女が私の方に近づいてくるではないか。

「家は反対の方角なんだけど、花に魅かれてここに来たんです。」
「実は私もそうなんです。今日、長岡天神へ・・・・・ 疲れていたけど来てみたんですヨ。」
白ばらのように、清純な感じの少女であった。

「お家はどこですか？」
「上本町、高槻小学校の近くなんです。」
夢を見ているような、不思議な時間が過ぎてゆく。

「これ、スターリングシルバーというんだと思うけど、香りがほかのばらのように甘くはないのネ。青いばらがまだつくられていなくて、これが一番近い色。何となく寂しそうなばらで、好き。
　家でも少し作っているんだけれど、赤だけだから少しつまんない。」

　スターリングシルバー。ライラックのような、強い香りがした。
「もう帰らなくては。英語のレッスンがあるんです。さようなら。」

　少女と別れて後、心ゆくまで香りに酔う。
　香りばかりではない。恋人のように口づける。甘い香りがただよう。はずかしさをかくして、この花、あの花にも・・・・・・・・

　花がふるえている。日もくれはじめ、風も少し出てきた。少しさむくなってきちゃった。
　名残りはおしいけど・・・・・ さようなら、さようなら・・・・・ おやすみ・・・・・ふりむかないで帰るからネ。

　自転車をこぎながら、先ほどの少女は、[ばらの精]ではなかったのかな、とふと思った。